前期日程

令和六年度入学試験問題

国　語（国語総合・現代文B・古典B）

注意事項

一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
二、解答はすべて別紙解答用紙に記入しなさい。
三、解答用紙は八枚です。
四、各解答用紙には受験番号を記入する欄がそれぞれ二箇所あります。二箇所とも記入しなさい。
五、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

（宮武久佳『知的財産と創造性』より。出題の都合上、一部改変している。）

注1　写本――手書きによって写した書物。
注2　『神学大全』――神学者トマス・アクィナスによる、キリスト教三大古典の一つ。神・人間・キリストについて論じた。
注3　ウィンブルドン――ウィンブルドン選手権。国際テニス連盟が定めた四大大会の一つ。

問一　傍線部①～⑤の漢字は読みをひらがなで記し、カタカナは漢字に直せ。

問二　傍線部(1)「ブックピープル」とあるが、本文中に挙げられた、さまざまな人(々)の本への関わり方の例の中で、「ブックピープル」の関わり方に最も近いものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　書物らしい書物のない地方で生まれ育ち、知人から聞いた『源氏物語』を死ぬほど読みたいと焦がれた菅原孝標女の、本への関わり方。ついに読めるようになった時には昼夜を問わず読みふけり、その嬉しさを「見る心地、后の位も何にかはせむ」と『更級日記』に書き残した。

イ　印刷術のない時代に、書物を増やすために写本をし、蔵書を獲得することに最大の努力をしたアレクサンドリア図書館の人々の、本への関わり方。停泊した船には立ち入り検査が行われ、本があれば一時預かりをして筆写し、七〇万冊ともいわれるコレクションを築いた。

ウ　薄暗い僧院の書写室で写本を作った、中世ヨーロッパの僧侶たちの、本への関わり方。金箔文字や宝石をあしらった豪華で美しい本を作ったが、量産することができなかったため、盗み出されることを恐れて鎖で本を書棚に結びつけ、本へのアクセス・読者を限定した。

エ　ルネサンス期に、本が自分たちにも買える商品となったことで、さまざまな出版物を楽しんだ読者の、本への関わり方。大航海時代を反映した冒険譚、各種の占い本、「ノストラダムスの予言書」などを楽しみ、本・新聞・雑誌などから市民革命に必要な知識を手に入れた。

問三　傍線部(2)「旅する自由という特権」とあるが、これはどのようなものか、その時代背景を含めて、詳しく説明せよ。

問四　傍線部(3)「本は宝である。しかし、それ以上に知は力である」とあるが、この時代に「知」が「力」であった理由を、簡潔に説明せよ。

問五　傍線部(4)「二一世紀に生きている私たちは基本的にこの延長線上にいると言ってよい」とあるが、これはどういうことか、一〇〇字程度で説明せよ。

問六　傍線部(5)「私たちはいかにして知を追跡し、捕まえることができるのだろうか」とあるが、「私たち」はなぜ「知」を捕まえようとするのか、本文中の語句を用いて、簡潔に説明せよ。

二、次の文章は、一九三八(昭和十三)年に発表された岡本かの子の「蔦(つた)の門」である。これを読んで、後の問いに答えよ。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

（岡本かの子「蔦の門」より。出題の都合上、一部改変している。）

注1　潜門――正門の横などに設けられた、くぐって出入りする戸。
注2　老婢――家庭などに住み込んでその家の主人に仕え、家事・雑事をする、年老いた女性。
注3　刺戟――ここでは「刺激」に同じ。
注4　大びら――人目をはばからないでするさま。おおっぴら。
注5　牽く――ここでは「引く」に同じ。

問一　傍線部①～⑤の漢字は読みをひらがなで記し、カタカナは漢字に直せ。

問二　傍線部(1)「和やかな一面」とは、どのようなことを指しているか、具体的に説明せよ。

問三　傍線部(2)「やはり不人情の一言にはかなり刺戟を受けたらしい」とあるが、その理由として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　すべてのものから孤独へほうり捨てられた「まき」にとって、「不人情」だという「ひろ子」の指摘は不意を突くものであったが、確かにその通りだと感じてしまったから。

イ　すべてのものから孤独へほうり捨てられた「まき」にとって、蔦の芽を切った犯人を言わせることは「不人情」でも何でもないが、「ひろ子」にとってはそう見えることに感心させられたから。

ウ　蔦の芽を切ったのは誰かという「まき」の詰問に対して、早熟た口調で「不人情」などという子供らしくない言葉を「ひろ子」が返答してくることに驚き、あきれ返ってしまったから。

エ　すべてのものから孤独へほうり捨てられた「まき」は、せめて「人情」のある人間として生きていこうとしていたが、子どもである「ひろ子」に見透かされた気がして恥ずかしかったから。

オ　「まき」は蔦の芽を切った犯人は「ひろ子」だと疑っていたが、犯人が別にいるということがわかり、「ひろ子」を疑ってしまった自分が「不人情」な人間だということになってしまったから。

問四　傍線部(3)「老婢は、大びらでひろ子の店に通い」とあるが、「まき」が「大びらで」通うようになった理由を説明せよ。

問五　傍線部(4)「老婢の感慨深そうな顔」とあるが、「まき」が「感慨深そうな顔」をした理由を説明せよ。

問六　傍線部(5)「孤独は孤独と牽き合うと同時に、孤独と孤独は、もはや孤独と孤独とでなくなって来た」の意味として、最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　二度の結婚をしたがうまくいかず、老いて「私」の家で働く「まき」の孤独と、伯母夫婦にうるさく言われて気兼ねしている「ひろ子」の孤独とが、互いに引き合った結果、「まき」には分別が備わり、「ひろ子」はしおらしく健気な性格になったということ。

イ　蔦の芽にいたずらをする子供がいなくなり寂しく思っていた「まき」の孤独と、父母を亡くし、伯母夫婦の前ではいじけていた「ひろ子」の孤独とが、互いに引き合った結果、まきには分別が備わり、ひろ子はしおらしく健気な性格になったということ。

ウ　正直だが時にはいこじにも感じられる性格のため生じた「まき」の孤独と、年の割にませて大人びた性格のため生じた「ひろ子」の孤独とが、互いに引き合った結果、二人は年の離れた母子のように睦まじい関係になったということ。

エ　身寄りとは仲たがいをし、夫や子どももいない「まき」の孤独と、父母を亡くして伯母夫婦に遠慮しながら暮らしている「ひろ子」の孤独とが、互いに引き合った結果、二人は年の離れた母子のように睦まじい関係になったということ。

三、次の文章は、A『大和物語』とB『老のすさみ』である。これを読み、後の問いに答えよ。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

（本文は、Aは高橋正治校注『新編　日本古典文学全集12　大和物語』小学館、一九九四年に、Bは木藤才蔵校注『連歌論集二　中世の文学』三弥井書店、一九八二年により、問題作成上、一部表記を改めた。）

注1　おなじ帝の御時――ここでは醍醐天皇（八八五～九三〇）の御代。
注2　御階（みはし）――宮中の正面の階段。
注3　禄に大袿（おほうちき）――褒美として下賜された大きな公家装束。
注4　天つ風――大空に吹く風。
注5　忠岑長歌――『古今和歌集』所収の壬生忠岑の長歌。
注6　連歌――五・七・五の句と七・七の句を交互に詠んでいく形態の詩歌。前の句に続けて詠むことを、句を付けるという。

問一　傍線部①「召し」、④「さぶらひ」、⑧「侍る」の敬語の種類（尊敬語・謙譲語・丁寧語）を特定し、さらに誰から誰に対する敬意を表すのか答えよ。

問二　傍線部②「そのよしつかうまつれ」、⑤「山べをさしていればなりけり」、⑥「白雲のこのかたにしもおりゐるは天つ風こそ吹きてきつらし」を現代語訳せよ。その際、②については「その」が示す内容を明らかにし、⑤と⑥については掛詞に着目すること。なお、⑥は白雲が風に吹き寄せられている情景が詠まれるが、そうした表面上の訳ではなく、帝と躬恒との応答を踏まえた訳に限定して答えよ。

問三　傍線部③「おほせたまひければ」と⑦「吹きてきつらし」を、例にならって、文法的に説明せよ。例は一行だが、二行で書いてもよい。

例　句（名詞）　を（格助詞）　作る（動詞・連体形）　なり（断定の助動詞・終止形）

問四　文章《B》によれば、ア・イは文章《A》のエピソードを踏まえた句である。その前提に立ち、次のⅠ・Ⅱを答えよ。

Ⅰ　アの「もの申す人」とは、誰が誰に対して何をしている行為か、「申す」の内容を明らかにして説明せよ。

Ⅱ　イの「君のめす」とは、誰が何をする行為を指しているか、行為の対象を明らかにして説明せよ。

問五　傍線部⑨「一句は、いづれの世にも歌をめす事侍ればなり」では何を述べているのか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　いつの御世であっても歌人を召し抱えて和歌を詠進させる行為はあるが、それを踏まえても、イ句は大和物語における帝と躬恒の応答がなくては成立しない。

イ　いつの御世であっても夫婦の間で和歌を詠進する行為はあるが、それを踏まえても、イ句は大和物語における帝と躬恒の応答がなくては成立しない。

ウ　いつの御世であっても和歌を帝に詠進する行為はあるので、それを踏まえれば、イ句は大和物語における帝と躬恒の応答がなくても成立する。

エ　いつの御世であっても和歌を帝に詠進し、周囲が耳を立てて聞く行為はあるので、それを踏まえればイ句は大和物語における帝と躬恒の応答がなくても成立する。

問六　傍線部⑩「かやうの事、もつとも粉骨なり」とあるが、そのことを説明した内容として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　「はるかに聞こえあげ」という表現は、和歌を身分の低い者にも伝えようとする意味に加えて、忠岑の長歌も引用することで、身分差を感じさせない句の構造にしているということ。

イ　「はるかに聞こえあげ」という表現は、遠い昔に詠まれた和歌が現在にまで伝わったという意味に加えて、忠岑の長歌の表現にも影響を与えたという句の構造にしているということ。

ウ　「はるかに聞こえあげ」という表現は、和歌を宮中のみならずはるか遠くの地方にも届かせる意味に加えて、忠岑の長歌の表現をも引用して、距離感を生み出す句の構造にしているということ。

エ　「はるかに聞こえあげ」という表現は、和歌を帝に詠んで献上する意味に加えて、忠岑の長歌の表現をも引用して、工夫を凝らした句の構造にしているということ。

問七　A『大和物語』が成立した平安時代とは異なる時代に成立した物語を、次のア～オの中から全て選び、記号で答えよ。

ア　『雨月物語』　イ　『うつほ物語』　ウ　『竹取物語』　エ　『平家物語』　オ　『伊勢物語』

四、次の文章は、中国の南北朝時代の詩人顔延之（がんえんし）が子弟のために教訓を記した「庭誥（ていこう）」という著作の一節である。これを読んで後の問いに答えよ。解答は現代かなづかいでもよい。なお設問の都合で訓点を省略した箇所がある。

この個所は著作権の関係で表示できません。
掲載の許諾が得られましたら、表示いたします。

注　○習――慣れること。　○蒸性染身――肉体の性質を変える。
○故曰「……」――二箇所とも括弧内が古書の引用であることを示す。　○芷蘭――香草の名。
○鮑魚之肆――干物を売る店。　○丹――朱色の鉱物の名。　○滅――粉々に砕く。
○毀――砕く、壊す。　○浸染之由――他のものから影響を受けること。

問一　傍線部①「亦」、②「豈」、④「是以」、⑤「慎」、⑧「苟」の読みを、送りがなも含めてひらがなで示せ。

問二　傍線部③「久而不知其芬」とはどのような状況でどうなることを言うか。わかりやすく説明せよ。

問三　傍線部⑥「乃能処而不汚其身耳」を送りがなも含めて全てひらがなで書き下し文にせよ。

問四　傍線部⑦「石可毀而不可使無堅」の現代語訳として最も適切なものを、次のア～オから一つ選び記号で答えよ。

ア　石は砕くことが可能なので、堅いという性質は無いに等しい。

イ　石は砕くことが可能なので、堅くないものと同様に扱わなければならない。

ウ　石は砕くことはできるが、堅くないものと同じように使用するべきではない。

エ　石は砕くことはできるが、堅いという性質を持たないものとは比べられない。

オ　石は砕くことはできるが、堅いという性質そのものを失わせることはできない。

問五　傍線部⑨「丹石之性」について、この文の中で「丹」「石」と同様の性質を持つとされているものを二つ抜き出して記せ。

問六　筆者はこの中でどのような教訓を述べているか。本文の主旨を踏まえ、七〇字以内で説明せよ。